

氏 名 : 楊 静芳
専攻分野の名称 : 博士 (学術)
学位記番号 : 博甲第 238 号
学位授与年月日 : 平成 26 年 9 月 30 日
学位授与の要件 : 学位規則第 4 条第 1 項該当 課程博士

学位論文名 : 中日昔話における異類婚姻譚の比較研究

論文審査委員 : (主査) 教授 石井 正己
(副査) 教授 千田 洋幸 教授 河添 房江
教授 高木 展郎 教授 飯泉 健司

学位論文要旨

本研究は、中日昔話における異類婚姻譚の類話に注目し、比較の方法を用い、これらの類話の発生、分布、影響関係などを解明しようとした。

第 1 部「中日昔話における異類婚姻譚の比較」では、共時的な視点で、様々な角度から、今日語られている中日昔話の異類婚姻譚を考察してきた。各章の主な研究成果は以下のとおりである。

第 1 章「中日七夕伝説における天の川の生成に関する比較研究」では、七夕伝説が中国から日本に伝来した事実を認めながらも、先行研究では触れなかった天の川の生成の問題を考察した。その結果、中国の白鳥処女説話と結びついた七夕伝説が日本に伝来してから、天の川の形成が日本人の人々によって改変され、今のような形になってきたことが明らかになった。

第 2 章「中国、朝鮮半島と日本に見られる「田螺女房」話型」では、中日韓の「田螺女房」話型を細かく比較・検討した。さらに、いままで指摘されなかった日本の沖縄と中国貴州省ミャオ族の話の類似点を明らかにし、該当話は貴州省から、沖縄を経由して、広がっていく可能性を提示した。

第 3 章「中日蛇婿の比較——「蛇婿と姉妹型」を中心に」では、中国と日本の南島に見られる「蛇婿と姉妹型」の特徴と伝播のあり方を明らかにした。さらに、「蛇婿と姉妹型」に対して、日本における再認識の必要性に言及した。

第 4 章「蛙婿」と「田螺息子」—異常誕生の主人公を中心に」では、これまで十分に検討されていなかった中国の「蛙婿」話型と日本の「田螺息子」話型を比較した。両者は類似したモチーフを持っているが、中国の蛙は神の変身と見られ、日本の田螺はあくまでも動物として見られるという根本的に異なる考え方があった。

第 2 部「中日文献記録と異類婚姻譚」は、通時的な視点で、文献記録に目を向け、中日昔話における異類婚姻譚の歴史を考察した。各章の主な研究成果は以下のとおりである。

第 5 章「文献記録に見られる狐女房——『善家秘記』良藤の話における『搜神記』「阿紫」の影響を中心に」では、『善家秘記』良藤の話における『搜神記』「阿紫」からの影響を明らかにした。

第 6 章「浦島伝説の変容と中国文献記録——お伽草子『浦島太郎』をめぐって」では、浦島太

郎の赴く異郷が、蓬莱山から竜宮城になったのは、宗教的要求に応じるために、中国の竜宮譚に見られる竜宮と不老不死を結びつけた発想を話に取り入れたからであることを明らかにした。

第7章「文献記録における異類人物の造形——『聊齋志異』「黄英」とお伽草子『かざしの姫君』を例として」では、異類人物の造形の分析を通して、両作品が当時すでに存在する文献および昔話を継承すると同時に、超越する一面を明らかにした。

以上のように、共時的な視点と通時的な視点で、個別研究を行った。個々の研究を通して、以下のような結論を導くことができる。

(1) 中日昔話の異類婚姻譚において類話が存在するのは、中国から日本への伝播が一つの要因である。さらには、中日の類似する信仰、習慣、生活様式も影響している。

中国の異類婚姻譚では、異類の正体が知られてから結婚し、幸せな婚姻を遂げるものが多い。対して、日本の異類婚姻譚では、異類の正体が知られる前に結婚し、正体が知られてから離縁する。それは、人間と自然の関係についての考え方が異なるためである。

中国には、古代から「天人合一」という哲学思想があり、それは中国人の最も根本的な考え方である。「天人合一」について、様々な解釈が見られる。その中、道教の観点では、「天」は自然、「人」は自然の一部であるため、自然と人はそもそも一体である。異類婚姻譚で、人間が異類を抵抗なく受け入れると語れるのは、道教の「天人合一」の考え方に影響されたためと考えられる。

一方、日本では、古くは同地域内での婚姻が主要であり、異部族間の婚姻が決して円満に遂行されるものではない。動物、植物などの異類は自由に変身できるが、あくまでも異なる集団、あるいは異界に属すものと見られる。だからこそ異類は一旦正体が知られたら、すぐに排除されるわけである。

(2) 移動論で中日の類話を考える際、従来の中国から朝鮮半島を経由して、日本に伝わるルートとともに、中国の南方から日本の南島を経由して、日本の本土に伝わるルートも重要である。その根源は長江文明、特に稲作の伝来に求められる。

長江文明は華北の黄河文明の拡大による圧迫によって春秋戦国時代末期に崩壊してしまい、長江文明を担った民は四散してしまった。南方へ逃れた越の民族は、その一部が南方から、日本の南島を経由して、日本列島に渡来した。さらに、近年、米のDNA分析から、朝鮮半島には存在しない中国固有の水稻の品種が混ざっていることが判明し、朝鮮半島を経由しない稲作の伝播ルートが示された。中国、特に中国南方の異類婚姻譚には、こういった人の移動、稲作の伝播に伴って、日本の南島を経由して日本本土に伝来されたものがある。今日でも、中国南方の少数民族と日本の南島の間には、共通する話が見られるのは、そのためであろう。

(3) 今日もなお語られている昔話は、古来の民間伝承と文献記録が相互に作用しながら、今日のような形に定着した。巷間に流布していた話から取材して加工した記録は、民間に戻っていくと伝承に新たな要素を加える。しかも、これは一回きりのことではなく、循環して終わりが無い。こういう循環の中において、一部の話が語られなくなった。文献記録の考察を通してこそ、話の変遷がわかってくるといえる。